

序章 調査の概要

1 調査実施の概要

(1) 調査の目的

家庭や学校での青少年の生活状況や青少年と保護者の意識について、様々な視点から分析・検討を行うことにより、今後の取組みの基礎資料とする。

本調査は小中学生調査とその保護者調査の二つに分け、同時に実施した。また、平成20年、平成23年、平成26年、平成29年に実施した調査とほぼ同一の内容をたずね、3年ごとの比較を通して、子どもの日常生活や親の子育てをめぐる意識と実態の変化を把握する。

(2) 調査内容

- ・生活習慣、家庭のルールやしつけ
- ・学校生活、よく遊ぶ友だちの数
- ・放課後の行動、学校以外の学習や活動
- ・夏休みの過ごし方
- ・コロナ禍による意識や親子関係の変化
- ・親子関係
- ・子育てに関する意識
- ・性格特性の自己評価、自己肯定感、幸福感
- ・インターネットの利用
- ・街への意識など

(3) 調査対象

荒川区内の小学5年生・6年生・中学生全員とその保護者

(4) 調査実施期日

調査票の発送：令和3年8月25日

回収締め切り：令和3年9月24日

(5) 調査機関

一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本青少年研究所

(6) 調査方法

各学校を通じてアンケート調査用紙を配布し、回収。

- ・調査票は小・中学校の担任を経由して児童・生徒に配布。保護者の調査票は子どもを通して保護者に渡し、回答済調査票は、子どもから担任に渡す。
- ・回収した調査票は学校から調査機関（日本青少年研究所）へ送付。

(7) 回収数

児童・生徒 5831 票（配布 6292 票、回収率 92.7%）、保護者 5577 票（配布数 6292 票、回収率 88.6%）。

(8) 調査対象者の属性

児童・生徒

(%)

		H20 年	H23 年	H26 年	H29 年	R3 年
性別	男子	51.1	50.6	50.0	48.8	50.3
	女子	47.6	48.3	49.0	49.5	47.6
	無回答	1.3	1.0	1.0	1.7	2.1
学年	小5	24.2	23.1	22.8	22.6	24.1
	小6	21.4	24.3	23.0	23.6	23.9
	中1	19.5	17.4	18.1	18.5	18.4
	中2	17.9	17.1	18.2	17.2	17.3
	中3	17.0	18.2	18.0	18.1	16.4
実数(人)		4858	5368	5731	5409	5831

※パーセントの数値は小数点以下第2位を四捨五入しているため、その和は必ずしも 100.0% に一致しない。

保護者

(%)

		H20 年	H23 年	H26 年	H29 年	R3 年
子どもとの関係	父(継父を含む)	7.6	7.2	7.2	6.8	7.8
	母(継母を含む)	90.7	91.4	91.4	91.8	90.8
	祖父母	0.6	0.6	0.5	0.6	0.5
	その他	0.3	0.4	0.3	0.1	0.3
	無回答	0.9	0.4	0.6	0.8	0.7
年齢	29 歳まで	0.1	0.6	0.4	0.2	0.2
	30 代	27.2	28.2	24.2	18.6	16.5
	40 代	62.7	62.8	66.3	70.2	67.8
	50 歳以上	9.0	7.8	8.6	10.4	12.8
	無回答	1.0	0.6	0.7	0.5	2.8
仕事について	フルタイム	25.7	27.0	28.0	31.7	37.6
	パートタイム・アルバイト	40.1	39.1	42.3	42.5	37.4
	自営業・家で仕事(事業の経営者、 家業の手伝い、内職など)	16.4	13.5	12.0	11.0	10.3
	無職	14.1	17.7	15.2	12.3	11.8
	その他	2.5	2.3	1.9	1.6	1.9
	無回答	1.3	0.5	0.7	0.9	0.9
実数(人)		4327	4872	5366	5121	5577

※パーセントの数値は小数点以下第2位を四捨五入しているため、その和は必ずしも 100.0% に一致しない。

2 調査結果の概要

(1) 生活習慣

① 起床時間と就寝時間 ⇒p. 11～

◎起床時間が H26 年と H29 年の調査に比べて、遅くなっている。

「7:00～7:29」「7:30以降」と回答した児童・生徒の割合がいずれも H26 年と H29 年の調査に比べて高くなっており、一方、「6:30前」「6:30～6:59」と回答した割合がいずれも低くなっている。

◎就寝時間は学年進行とともに遅くなり、中3では「0:00以降」が5割弱と高い。

就寝時間について、「0:00以降」と回答した児童・生徒の割合が2割弱で、学年進行とともに高くなり、中3で48.2%に達する。

② 食事 ⇒p. 13～

◎朝食を「毎日食べる」と回答した児童・生徒の割合が前回調査よりやや低くなっている。

朝ごはんを「毎日食べる」と回答した児童・生徒の割合が82.1%で、H23年以降の調査に比べてやや低くなっている。

朝ごはんを毎日食べない理由について、「朝は食べたくない」が最も多く、次いで「食べる時間がない」だった。

◎夕食を家族と一緒に食べることが多くなっている。

平日の夕食を一緒に食べる人について、「お母さん」「お父さん」「きょうだい」と回答した割合がいずれも過去の調査より高くなっている。特に「お父さん」の増加が顕著である。

③ あいさつ ⇒p. 15～

◎家族にあいさつする児童・生徒が増えている。

家族に「おはよう」「いただきます」「ごちそうさま」「ただいま」「おやすみなさい」というあいさつを「いつもする」と回答した児童・生徒の割合がいずれも過去4回の調査より高くなっている。

④ 生活習慣 ⇒p. 16～

◎児童・生徒の生活習慣の改善が見られた。また、子どもに対し、家庭でルールを決めていることが多くなっている。

「朝、人に起こされないで自分で起きる」「寝る前に、歯磨きをする」「ごはんの前に手を洗う」「言われなくても宿題をする」について、「いつもそうする」「だいたいそうする」と回答した児童・生徒の割合がいずれも過去の調査より高くなっている。

また、子どもに対し、家庭で「寝る前の歯磨き」「寝る時間」「ゲームをする時間」「携帯電話・スマートフォンなどをする時間」「勉強時間」を決めていると回答した保護者の割合が過去4回の調査よりいずれも高くなっている。一方、「門限」「友達と遊ぶ時間」を決めている割合が低くなっている。

(2) 学校生活

① 学校での生活について ⇒p. 21～

◎学校生活への満足度が高くなっている。

学校生活に「とても満足している」と回答した児童・生徒の割合が過去4回の調査より高くなっている。

また、「学校の授業がよくわかる」「いまのクラスのふんいきは好きだ」「先生は私の話をよく聞いてくれる」「学校で困っている人を見たら助けてあげる」「学校で自分が困ったときに助けてくれる人がいる」に「よくあてはまる」「まああてはまる」と回答した児童・生徒の割合がいずれも過去4回の調査に比べて高くなっている。

② よく遊ぶ友達の人数 ⇒p. 26～

◎よく遊ぶ友達の人数が減少傾向にある。

よく遊ぶ友達の人数が「10人以上いる」と回答した児童・生徒の割合が過去の調査に比べて低くなっている。

(3) 放課後の行動

① 放課後の行動 ⇒p. 28～

◎ゲームをする時間や家族とおしゃべりをする時間が増え、友達と遊ぶことが減少している。

放課後、「1時間以上する」ことについて、「パソコンやスマートフォン・ゲーム機で遊ぶ」「家族とおしゃべりをする」「学校の宿題以外の勉強をする」と回答した児童・生徒の割合が過去4回の調査に比べ高くなり、反対に「友達と遊ぶ」「友達とラインやメールをしたりする」が低くなっている。

② 学校以外の学習や活動 ⇒p. 31～

◎児童・生徒の5割強が「学習塾へ行っている」。

学校のほかに決まった学習や活動について、「学習塾へ行っている」と回答した児童・生徒の割合が52.2%と、H29年の調査とほぼ同じ水準を保っている。「スポーツの教室やクラブに参加している」が34.3%と、H23年以降の調査に比べて低くなっている。

(4) 夏休みの過ごし方

① 夏休みの過ごし方 ⇒p. 33～

◎「学習塾や習い事」が7割強だが、旅行や親族訪問、部活動など、多くの活動が減少している。

コロナ禍における令和3年の夏休みは、「映画館、カラオケ、ゲームセンター」「宿泊旅行」「日帰り旅行」「友人の家」「おじいちゃん・おばあちゃんの家」で「よく過ごした」「たまに過ごした」と回答した児童・生徒の割合がH29年の調査に比べて、いずれも著しく減少している。「学童クラブや学校の部活動」「学校のサマースクールや補充教室・自習教室」「地域の子ども会活動やスポーツ活動」「図書館やひろば館など公共の施設」の利用や参加も減少している。一方、「学習塾や習い事」の割合が70.8%と、あまり変わらなかった。

② 夏休み中の自然体験 ⇒p. 35～

◎野外活動や植物や昆虫などの観察活動の未体験率がいずれも6割を超えている。

この夏休み、キャンプ、山登りやハイキングなどの野外活動をしたことが「全くない」と回答した児童・生徒の割合が7割を超えている。身近な緑地などで植物や動物・昆虫を観察したことが「全くない」と回答した割合が6割強となっている。また、学年進行とともに、未体験率が高くなっていく。

③ 夏休みの心身の状態 ⇒p. 36～

◎約8割の児童・生徒が楽しい気分やリラックスした気分での夏休みを過ごした。

この夏休みを「明るく、楽しい気分で過ごした」「落ち着いたリラックスした気分でも過ごした」に「いつもそうだった」「そういう時が多かった」と回答した児童・生徒の割合がいずれも約8割となっている。

(5) コロナ禍による意識や親子関係の変化

① 大切さを感じたこと ⇒p. 39～

◎約6割の児童・生徒が家族や友達の大切さを感じるようになったと回答した。

コロナ禍の生活を経験して、「家族の大切さを感じるようになった」「友達の大切さを感じるようになった」と回答した児童・生徒の割合が約6割となり、「対面でのコミュニケーションは大切だと思うようになった」「学校の大切さを感じるようになった」が約4割である。

② 親子関係の変化 ⇒p. 41～

◎親（保護者）と一緒にいる時間やコミュニケーションが増えた。

コロナの影響で、「親（保護者）とよく話すようになった」「親（保護者）と一緒に食事をする時間が増えた」に「全くそうだ」「まあそうだ」と回答した児童・生徒の割合がいずれも約7割と高い。

(6) 親子関係

① 親子関係 ⇒p. 46～

◎親（保護者）に「よくほめられる」が増え、「よくしかられる」が減少している。

「家族と話をする」「親（保護者）にほめられる」が「よくある」と回答した児童・生徒の割合がいずれも過去4回の調査より高くなり、反対に「親（保護者）にしかられる」が低くなっている。

② 親子のかかわり ⇒p. 49～

◎保護者は子どもの勉強や学校生活への関心が高くなっている。

親（保護者）は、「勉強をみてくれる」「テストの結果を聞いてくれる」「学校の授業参観や運動会などの行事に来てくれる」「私の話をよく聞いてくれる」「手伝いなどをしたら礼を言うってくれる」と回答した（「あてはまる」「だいたいあてはまる」）児童・生徒の割合がいずれも8割を超え、H29年の調査より高くなっている。また、「子どもの勉強をみてあげることが多い」「学校行事以外でも子どものことでよく学校に行く」と回答した保護者の割合も高くなっている。

③ 子どもへの接し方 ⇒p. 52～

◎保護者の95%強は「子どもが間違っている時は叱る」「困った時は助けてあげる」と回答した。

「子どもが間違っているときは、きちんと叱る」「子どもが困った時、助けてあげる」「できるだけ子ども自身の意思を尊重する」について、「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した保護者の割合がいずれも9割を超え、「子どもの悩みをよく聞いてあげる」「子どもをよくほめてあげる」も8割台の高い比率となっている。

(7) 子育てに関する意識

① 子育てに対する態度 ⇒p. 54～

◎子どもとの対立を避け、子どもの独立や将来のことを急がずに決めたいと考えている親(保護者)が増加している。

「子どもはできるだけ早く自分の将来の目標を決めて、それに向かって努力してほしい」「子どもは親(保護者)から経済的に早く独立するべきだ」と考えている(「とてもそう思う」「まあそう思う」)保護者の割合が過去4回の調査に比べて低くなり、反対に「子どもは将来のことをあまり急いで決めず、できるだけいろいろなことを経験してほしい」「子どもが大人になっても、親(保護者)に経済力があれば、生活の援助をしてもよい」と考えている割合が高くなっている。また、「できれば、子どもとのもめ事を避けたい」「子どもの日常生活に立ち入らないようにしたい」「子どもは子ども、自分は自分の生きがいを追及したい」と考えている保護者の割合も高くなっている。

② 育てたい子ども像 ⇒p. 55～

◎「我慢強い」「責任感がある」「明るい」の割合が低くなっている。

子どもをどのような資質の人間に育てたいかについて、「思いやりがある」「自分の意見を言える」「礼儀正しい」が5回の調査に共通して比率が高かったが、「我慢強い」「責任感がある」「明るい」の割合が過去4回の調査に比べて減じている。

③ 子どもの人生にとって重要なこと ⇒p. 58～

◎「好きなことをする余裕をもつこと」が重視され、結婚や子どもを持つことへの関心が低下している。

「好きなことをする余裕を持つこと」「世の中のいろいろな問題にチャレンジすること」が「大変重要」と回答した保護者の割合が過去4回の調査に比べて高くなり、反対に、「良い結婚相手を見つけ、幸せな家庭生活を送ること」「子どもを持ち、育てること」が「大変重要」と回答した割合が著しく減少している。

④ 子育ての悩みについての相談相手 ⇒p. 59～

◎「配偶者・パートナー」が増え、「友人」「学校の先生」が減少している。

子育ての悩みについての相談相手は、過去4回の調査に比べて、「配偶者・パートナー」の割合が高くなり、「友人」「学校の先生」が低くなっている。

(8) 自己評価

① 性格特性の自己評価 ⇒p. 63～

◎人の話をよく聞き、人の意見に影響されやすく、人に従う児童・生徒が増加している。

児童・生徒の性格特性についての自己評価では、「人の話をよく聞いて理解しようとするほうだ」「まわりの人の意見によく影響されるほうだ」「人に頼られるほうだ」「リーダーになるより従うほうだ」について、「よくあてはまる」「まああてはまる」と回答した割合が過去4回の調査に比べて、いずれも高くなっている。

② 自分自身についての評価 ⇒p. 67～

◎自己肯定感がH29年の調査に比べて高くなっており、反対に「将来への希望を持っている」が低下している。

「自分自身が好きだ」「自分自身をほめることができる」「自分自身を信じていることができる」「自分の意見を持っている」といった自己肯定感に関する項目では、「よくあてはまる」「まああてはまる」と回答した割合がいずれも H29 年調査に比べて高くなっている。反対に、「将来への希望を持っている」の割合が低くなっている。

また、保護者からみた子どもの自己肯定感がいずれも子ども自身の評価より大幅に高くなっている。

③ 幸福感 ⇒p. 70～

◎幸せだと感じる児童・生徒、保護者とも 8 割を超えている。

幸せだと「大いに感じる」「まあ感じる」と回答した児童・生徒の割合が 82.5%、保護者が 85.7%と、双方とも 8 割を超えている。また、H29 年の調査に比べて、児童・生徒と保護者とも高くなっている。

(9) インターネットの利用

① 所持している機器 ⇒p. 79～

◎スマートフォンの所持率が 69.3%、ネットに接続できるゲーム機の所持率が 75.6%。

インターネットに接続できるパソコンや携帯電話・スマートフォン・タブレット端末・ゲーム機などの機器の所持率が 93.8%と年々高くなっている。所持している端末を見ると、「スマートフォン」が 69.3%、ゲーム機が 75.6%、タブレット端末が 42.6%と高くなっている。

② スマートフォンなどを利用している機能と利用時のルール ⇒p. 82～

◎利用機能が多岐にわたり、「利用時間を決めた」が多くなっている。

利用している機能が最も多いのは、「インターネット」(73.7%)で、次いで「動画」(68.7%)、「ゲーム」(66.2%)、「ラインなどの SNS」(61.7%)などとなっている。各機能とも過去の調査に比べて、使用の割合が高くなっている。

また、子どもに「利用時間を決めた」と回答した保護者の割合が H29 年調査より高くなっている。

③ インターネットの利用とその目的 ⇒p. 85～

◎インターネットの利用率が増え、「ルールを決めている」も増えている。利用の目的は主に情報検索・調べものである。

子どもはインターネットを「利用している」と回答した保護者の割合が 89.3%と、過去の調査より 10 ポイント以上も高くなっている。

1 日のインターネットの利用時間を「決めていない」と回答した割合は、保護者と児童・生徒とも過去の調査より低くなっている。また、家ではインターネットにアクセスする内容などについてのルールは「決められている」と回答した児童・生徒の割合が 4 割強と、前回調査より高くなっている。

インターネットを利用している目的について、最も多い回答は児童・生徒と保護者とも「情報検索（調べもの）」であった。

④ SNS 利用に対する不安感 ⇒p. 88～

◎子どもの SNS 利用に不安に感じたことが「ある」と回答した保護者の割合が 64.6%に対し、児童・生徒は 10.8%にとどまっている。

SNSを使っていて犯罪やトラブルなどに巻き込まれる危険を感じたことは「ある」と回答した児童・生徒の割合が10.8%に対し、子どもがLINEなどのSNSを利用して不安に感じるものが「ある」と回答した保護者の割合は64.6%と高くなっている。H29年の調査に比べて、双方ともその割合がやや高くなっている。

感じた不安について、保護者の割合が高いのは「ネットいじめ」(69.3%)、「個人情報の流出」(60.1%)、「誹謗・中傷」(50.8%)などであり、児童・生徒の割合が高いのは「ウイルス感染」「詐欺被害」「批判・悪口」「個人情報の流出」で、いずれも3割台にとどまっている。

(10) 街への意識

① 住んでいる街への愛着 ⇒p.90～

◎住んでいる街が「好き」「まあ好き」と回答した児童・生徒と保護者がいずれも約9割となり、「住んでいる街のために役に立ちたい」と考えている児童・生徒が5割弱である。

住んでいる街が「好き」「まあ好き」と回答した割合は、児童・生徒が88.4%、保護者が92.4%となっている。

また、「いま住んでいる地域に将来も住みたい」と考えている（「とてもそう思う」「まあそう思う」）児童・生徒の割合が4割弱、「住んでいる街のために役に立ちたい」が5割弱となっているのに対し、「将来、今住んでいる地域で働きたい」は2割強にとどまっている。

② 街のボランティア活動などへの参加 ⇒p.93～

◎街のボランティア活動や行事に参加した児童・生徒が減少傾向となっている。

街のボランティア活動やお祭りなどの行事に参加したことが「よくある」と回答した児童・生徒の割合が20.7%と、過去4回の調査に比べて低くなっている。